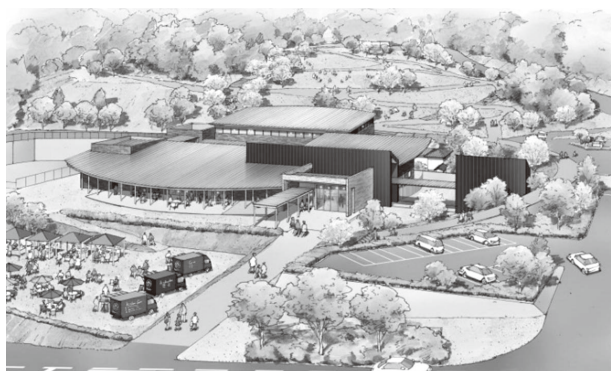




わずか74年後には、日本の人口が今の半数に減少すると見込まれるなか、“ふるさと熊野”を子や孫に残すために、私たちには今できることがあります。

個性豊かな文化を活かした魅力的なまちづくりも、移住する場所、住み続ける場所として人々をまちに惹き付ける大切な取り組みの一つのはずです。

熊野町は、筆産業とそれにより培われた文化芸術が息づくまちです。このソフトパワーを活かし、この地に住む人々がつながり、まちと文化を未来につなげるため、都市公園と観光交流拠点施設の建設を進めています。



9月23日(水祝)にオープンする創作館のプレイベントの一環として、7月25日(土)に開催した「ふでりんの森プロジェクト『ミロコマチコと筆の木づくり』」と題して創作体験イベントを行いました。筆の里工房での企画展示「ミロコマチコうごめきなぞる」の開催に合わせたこのワークショップには、乳幼児から大人までの幅広い年代による60人の参加をいただきました。

〈筆の木づくり〉

段ボールで形づくったミロコマチコさんデザインの「筆の木」にアクリル絵の具で思い思いに色付けをし、折り紙やクレヨンなどで装飾しました。仕上げるに、みんなの「大きくなれ」の掛け声とともに作品に水を与えて、「筆の木」の完成を参加者全員で喜び合いました。

〈ふでりんの森プロジェクト〉

大・中・小の、合わせて約150本の「筆の木」を制作し、施設のオープンに合わせて創作館に展示する、住民参加型の創作プロジェクトです。

今回のワークショップ参加者のほか、町立小学校の全クラスの児童と両中学校の美術クラブ生徒により「筆の木」に生命の輝きを与えていただきました。



井上さん親子(城之堀地区在住)

気になる作家だけど遠い存在に思えたミロコマチコさんと一緒にアート活動ができるこのワークショップにぜひ参加したいと思い、応募しました。今日、久しぶりに子どもたちと一緒に作品を作ってみたら、子どもの成長や感性の違いが作品に表れていて、本当に面白かったです。

創作館では、子どもたちが家ではできないようなことも思いきり楽しめたり、中高生も気軽に参加できたりする企画があったらいいなと思います。デジタル機器から少し距離を置いて、モノづくりなどを楽しんでストレスを和らげることができる、そんな魅力的な場所になることを期待しています。

榊井さん親子(海田町在住)

小学校で配られた展覧会のチラシのフジラの絵がすごく素敵でした。ワークショップのことも書いてあり、子どもも喜ぶと思い参加しました。家族全員が絵の具やクレヨンで絵を描くことが好きなので、楽しかったです。

たくさんの「筆の木」でつくられる「ふでりんの森」が9月23日から創作館で飾られるので、見に来たいと思っています。

公園が整備されると、家ではなかなかできない創作や遊具などでの遊びの両方を楽しめる場所になりそうで、楽しみです。



撮影：萬壽光樹

画家・絵本作家 ミロコマチコさん

1981年大阪府生まれ。絵本、装画、展覧会、ライブペインティングなど活動は多岐にわたり、いきものの姿を伸びやかに描き、国内外から支持を集めている。2012年、『オオカミがとびひ』で絵本デビュー。同作で第18回日本絵本賞大賞を受賞。以降、講談社出版文化賞絵本賞、小学館児童出版文化賞など多数受賞。

2019年から南の島に移住し、自然の動きと密接なつながりを感じながら、見えないものの気配や生命の煌めきが濃厚に漂う作品を生み出している。

ー 今回のワークショップの感想をお聞かせください。

同じ道具で同じ色を使っても、みんな全然違うものができていく。それぞれの手の癖や、筆圧、大胆だったり、丁寧だったり、心に思い描いてるものが表れてくるからおもしろい。

自分なりのテーマで真剣に取り組んでる姿はうつくしく、見ていて嬉しくなります。

ー 創作館でのこれからの活動に、どのようなことを期待されますか？

絵を描くことは、外の世界の命の“うごめき”からエネルギーをもらい、自分の体を通して描き出すこと。今日も2歳に満たない乳児が無心にクレヨンで遊ぶ姿が見られました。絵には正解なんてありません。汚れないようにと気にしたりせず、絵を描くことだけに捉われずヌルヌルした感触を楽しむだけでもいい。

新しい施設では、日常では体験できないことができたり、絵だけでなく表現することが「楽しい」「ワクワクする」と感じられたりする、そんな場であってほしいですね。



熊野町美術博物館 筆の里工房 展覧会「ミロコマチコ うごめきなぞる」 会期 9月23日(水祝)まで

本展では、ミロコマチコが描いてきた絵本の世界をはじめ、長年にわたって愛猫たちのエピソードをつづってきたカレンダー「鉄三、うちの猫たちはね。」の原画や手書き文字の仕事のほか、ダイナミックなライブペイント映像など、筆にこだわった世界を紹介します。

10月号では、ミュージアムバスの制作や開設記念シンポジウムの様子についてお伝えします。